

## クープラン：クラヴサン曲集 第2巻 第8組曲より パッサカリア 口短調

バロック時代に活躍したフランスの作曲家、フランソワ・クープラン(1668～1733)は、オルガンとクラヴサン(チェンバロ)の名手としても知られた。作品のなかでは、「オールド」と呼ばれるクラヴサンのための組曲が、特に重要な位置を占めている。彼は、全部で27の組曲(=オールド)を残しており、これらは4巻に分けて出版された。個々の曲は、さまざまな舞曲の形式によるものをはじめ、個性的な標題を持つ性格的小品など、きわめて多彩な様相を示している。

今回演奏される「パッサカリア」は、「クラヴサン曲集第2巻」に収められた、口短調の「第8組曲(第8オールド)」(全10曲)の第9曲であり、パッサカリアとは、変奏曲形式の一種である。この曲では、半音階的進行を含んで上行するバス声部の旋律の上に、主題が現れ、その主題が繰り返される間に8つの「クプレ」が挟まれる。荘厳にして劇的な展開と共に、力強さを印象づけるこのパッサカリアは、第8組曲のなかで最も規模が大きく、クープランの傑作の一つに数えられる。

## J.S. バッハ：トリオ・ソナタ 第3番 ニ短調 BWV 527

バロック時代のドイツが生んだ巨匠ヨハン・セバスティアン・バッハ(1685～1750)の、ライブツィヒ時代の作とされるこのソナタは、オルガンのための「トリオ・ソナタ」BWV525～530の、第3番にあたる。トリオ・ソナタとは、バロック時代に親しまれた室内楽曲のジャンルであり、本来は二つの旋律楽器と通奏低音による編成だが、バッハはこれを、鍵盤楽器の独奏という形で書き、右手、左手、オルガンの足鍵盤(ペダル鍵盤)が各声部を担当する3声部のソナタとした。長男ヴェルヘルム・フリードマンへの教育を目的として、1730年前後に作曲されたと、推定されている。ニ短調の第3番BWV527は、第1楽章：アンダンテ、第2楽章：アダージョ・エ・ドルチェ、第3楽章：ヴィヴァーチェ、という3楽章から成る。なお、ヘ長調の第2楽章については、バッハは後年、「ヴァイオリン、フルート、チェンバロのための三重協奏曲」BWV1044に転用している。

## フォーレ：9つの前奏曲 Op.103

近代フランスの作曲家、ガブリエル・フォーレ(1845～1924)のピアノ音楽は、きめ細かな和声書法により、デリケートな旋律美に彩られ、そこから生み出される内省的な表現が、特色であり魅力となっている。「9つの前奏曲」は、第1曲から第3曲が1909～10年に、第4曲から第9曲が1911年に作曲された。内訳は次のとおりであり、多様なスタイルで書かれた短い9曲が並ぶ。フォーレ自身が全曲を切れ目なく続けて演奏することを望み、曲の配列について熟慮した、と伝えられているとおり、全体的な統一が図られている。

第1番：アンダンテ・モルト・モデラート、変ニ長調。第2番：アレグロ、嬰ハ短調。第3番：アンダンテ、ト短調。第4番：アレグレット・モデラート、ヘ長調。第5番：アレグロ、ニ短調。第6番：アンダンテ、変ホ短調。第7番：アンダンテ・コン・モート、イ長調。第8番：アレグロ、ハ短調。第9番：アダージョ、ホ短調。

## バード：ウォルシンガム

現代のピアノが発明されるまでの間、16世紀から18世紀までの間は、チェンバロが最もポピュラーな鍵盤楽器であった。羽の軸ないし金属製の「ツメ」が弦をはじくことによって音を出す、この鍵盤楽器は、ヴァージナル、スピネット、チェンバロ(=クラヴサン、ハーブシコード)と、種類も名称も、時期や国によってさまざまだが、そのなかでヴァージナルは、16世紀イギリスで流行した、チェンバロの一種である。そして、「フィッツウィリアム・ヴァージナル・ブック」などの、当時の主要な筆写本によって、ウィリアム・バード(1542末/43頃～1623)をはじめとする、いわゆるヴァージナリストたちの作品が伝えられている。

バードの残したヴァージナル曲は、その多くが舞曲と変奏曲であり、「ウォルシンガム」は、変奏曲として書かれた。当時流行していたバラード「ウォルシンガムへ行ったとき」から採られた、短い主題をもとに、全部で22の変奏が続く。その変容のしかたは多彩であり、大胆な転調を含めて、曲想が変化に富んでいる。

## バード：セリンジャーのラウンド

バードの活躍したエリザベス朝時代に流行したという民俗舞踊「セリンジャーのラウンド」に基づいて、ヴァージナル独奏のために書かれた変奏曲。ラウンドとは、声楽では輪唱を意味するが、舞踊では、輪舞またはそれを伴奏する舞曲をいう。バードのこの作品は、舞曲に基づくことから、活気に富むリズムが特徴的な変奏曲となっている。

## バード：鐘

「グラウンドによるアリアと変奏」というジャンルで書かれた曲。グラウンドとは、当時のイギリスで好まれた変奏曲の形式であり、繰り返される一定の短い低音旋律の上で、楽想が展開される。「鐘」においては、冒頭のバス声部に現れる二つの音の、シンプルな音型が繰り返される上に、拍子の変化なども伴いながら、変奏が展開されてゆく。

## リスト：バッハの動機による変奏曲 S.180/R.24

ハンガリーのライディング(現在はオーストリア領)に生まれたフランツ・リスト(1811～86)は、ヨーロッパ各地で名ピアニストとして活躍し、音楽史上最も優れたピアニストの一人であった。彼が1862年に作曲し、アントン・ルビンシテインに献呈したこの壮麗な変奏曲は、J.S.バッハのカンタータ第12番「泣き、嘆き、憂い、おののき」BWV12の最初の合唱(第2曲)に現れる、半音で下行する低音部の動機を主題として、パッサカリア風に作られている。なお、この低音動機をバッハは後年、「ミサ曲口短調」の第16曲「ケルチフィクス(十字架にかけられて)」にも用いた。

リストのこの変奏曲には、名ピアニストの彼ならではの華麗な技巧が盛り込まれている。譜面の冒頭には、主題となるバッハの低音動機が掲載され、原曲の歌詞の一部「泣き、嘆き、憂い、おののき。それはキリスト者(キリスト教徒)の涙の糧である」も掲げられている。そして、曲の終わり近くには、バッハの同じカンタータから、第7曲の穏やかなコラルのメロディーが現れ、「神のなさることは、すべて良し…」と始まるその歌詞も、書き添えられている。